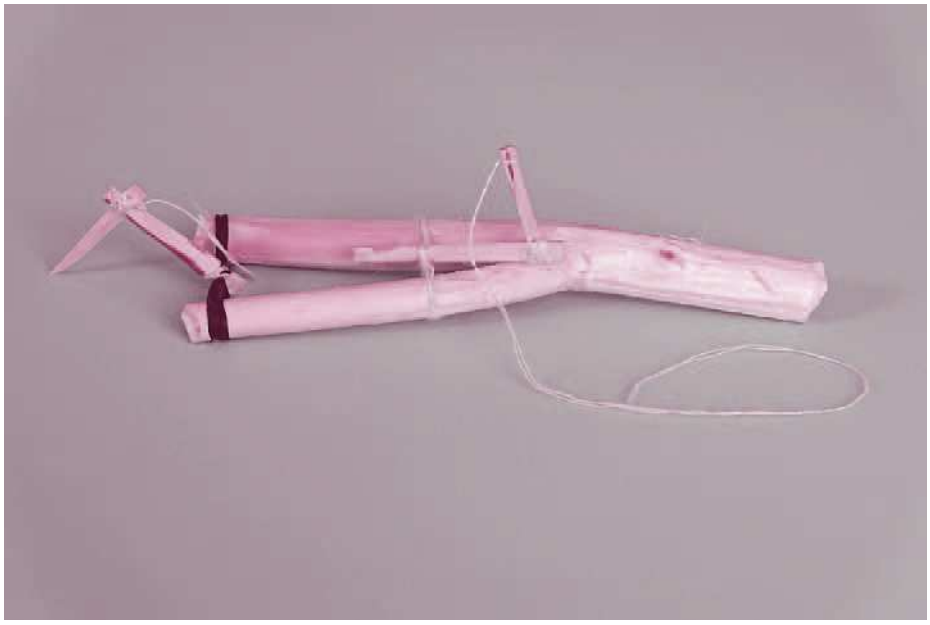
ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No. 108



H7.62　クマ用ワナ模型　コリヤーク　ロシア/カムチャツカ半島/レスナヤ
19.5 x 7.5 x 3.0cm　1994年 大島稔氏収集

　クマを仕留めるワナの模型である。実物は二本の立ち木の間にクジラの腱を張り、そこにナイフを装着する。クジラの腱を強くねじり、その反発力でナイフをクマの脇腹に振り下ろし、仕留めるという。ねじったヒモの反発力を利用するワナは西シベリアからアラスカ沿岸部にまで分布しているが、クマを対象にしたワナは珍しい。

目次　Contents

1　表紙　クマ用ワナ模型
2　ロビー展「サハの伝説と昔話の世界―ナターリヤ・ネウストローエヴァ作品展」
　／展示解説＆切り絵講習会「サハの昔話と切り絵」
3　講習会「サハの伝統楽器「ホムス」を弾いてみよう―口琴のおはなしと演奏体験」
　／ロビー展・オホーツクシリーズ11「北の状景から」
4　企画展「永遠のジャッカ・ドフニ―北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニの35年間」
5　講座「海外写真でたどる日本の近代捕鯨」
　／講座「場所請負人と白老」
6　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

ロビー展

サハの伝説と昔話の世界
―ナターリヤ･ネウストローエヴァ作品展

2017. 12. 2−12. 20

会場：北方民族博物館・ロビー

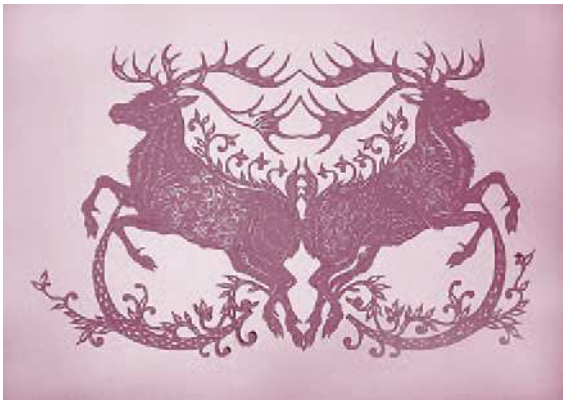
サハ出身の版画家、イラストレーターであるナターリヤ・ネウストローエヴァさんの作品で、サハの伝説や昔話の世界を紹介しました。ネウストローエヴァさんは留学生として来日し、大学院で研究に励むかたわら、銅版画やイラスト、切り絵を学んできました。その作品の多くが、故郷の昔話や伝説、世界観などをモチーフとしています。サハは「ヤクート」とも呼ばれ、ロシア連邦サハ共和国を中心に暮らす民族です。10〜13世紀にかけてバイカル湖周辺から北上した人びとを中心に形成された民族と考えられ、ウマ、ウシの牧畜を伝統的な生業としてきました。

このロビー展では、イラスト、切り絵各20点ずつの作品を紹介しました。イラストでは、最初に「５頭の牛のベイベリケーンばあちゃん」という昔話のストーリーとともに各場面を描いた11枚の作品を並べ、他にもさまざまな昔話や伝説の場面を描いた作品を展示しました。それぞれの作品で、登場人物や動物、自然の風景が細かなタッチと鮮やかな色彩で活き活きと描かれていました。また、登場人物の服装や家畜、野生動物、背景に置かれた道具や風景のなかに、サハの伝統的な文化や自然が表現されていました。

後半では、色紙を切り抜いて制作された切り絵作品を展示しました。やはりサハの伝説や昔話をモチーフとした作品を中心に、野生動物や欧米の神話を表現した作品もありました。独特の形や構図、そしてほとんどハサミだけで作ったというのが信じられないほど繊細な切り抜きによって、表現力豊かな作品に仕上がっていました。

このロビー展により、ネウストローエヴァさんならではの美しく独創的な作品群に触れるとともに、サハの豊かな精神世界に親しんでいただけたのではないでしょうか。

（学芸グループ　中田　篤）



切り絵作品「三日月とトナカイ」

展示解説＆切り絵講習会

サハの昔話と切り絵

2017. 12. 10

講師：ナターリヤ・ネウストローエヴァ氏
（版画家・イラストレーター）

ロビー展の関連事業として、出展者のナターリヤ・ネウストローエヴァさんに来館いただき、展示の解説と切り絵の講習会をおこないました。

まず、ロビー展会場で、展示作品について解説をしていただきました。前半のイラスト作品のコーナーでは、サハの自然や伝統的な生活、題材となった昔話のストーリーなどに触れながら、イラストを描く上で気をつけたことや特に注目して欲しい点などを紹介してくださいました。後半の切り絵のコーナーでは、子どもの頃の思い出やサハの動物、伝説上の妖怪などの話とともに、細かい切り絵作品を作り上げる方法についても解説していただきました。

次に講堂に移動し、簡単な切り絵作品の体験講習会をおこないました。講師が事前に下絵を描いた画用紙を３種類用意してくれていて、最初に一番簡単な「チョロン」（馬乳酒を飲むための器）の切り絵から作成することにしました。参加者は、小さなハサミを使い、下絵の指示された部分を切り抜いていきます。特に細かいぎざぎざの文様の部分、また蔓草のような曲線の部分を切り抜くのはかなり難しく、多くの参加者が時間をかけ、苦戦している様子でした。間違って、必要な部分を本体から切り抜いてしまった参加者もいました。こうして切り抜いたものを、背景となる色画用紙の上に置いて完成です。

結局、時間の都合で、ほとんどの参加者は１種類を完成させるのがやっとで、残った２種類の下絵はお土産に持ち帰っていただきました。かなり難しい講習会となりましたが、参加者には満足いただけたようでした。実際に体験していただくことによって、ロビー展で展示されている切り絵作品の完成度の高さ、制作の難しさをわかっていただけたのではないかと思います。

（学芸グループ　中田　篤）

切り絵を指導するネウストローエヴァ講師

講習会

サハの伝統楽器「ホムス」を弾いてみよう
口琴のおはなしと演奏体験

2017. 12. 17

講師：荏原小百合氏
（北海道科学大学高等教育支援センター准教授）

ロビー展の関連事業として、サハの民族文化について広く知っていただくため、国民的楽器「ホムス」の紹介と演奏体験をおこないました。講師の荏原（えはら）さんは、音楽講師としてサハ共和国に長期滞在の経験をお持ちで、「ホムス」を通して、サハの人と自然との関係を研究されています。

まず、サハの厳しい気候や豊かな自然、伝統的な牧畜や精神文化、現在の生活などについて、講師自身の体験を交えながら、たくさんの写真を使って紹介していただきました。また、「ホムス」は世界中でみられる口琴という楽器に含まれること、ほとんどの場合は地味な存在である口琴が、サハでは今も多くの機会に演奏され、また「ホムス」のデザインが夏祭りの看板や雑誌など、さまざまな媒体に描かれているという状況を説明していただきました。

次に、口琴の演奏体験をおこないました。最初に講師がご自身の「ホムス」で演奏を実演し、続いて参加者全員で金属製口琴を使って演奏体験を行いました。当館には体験用の金属製口琴「ドロンブ」がありましたので、今回はおもにそちらを活用しました。多少形は異なるものの、基本的な構造や演奏方法は「ホムス」と同じです。利き手ではない手で口琴の丸い部分をしっかりと持ち、利き手の人差し指で振動弁をはじいた音を口のなかで共鳴させます。口琴の弁は一本しかないので、ひとつの音しか出ないはずなのですが、弁をはじく向きや速さ、舌の位置や喉の開き方、呼吸などによって多様な響きを出すことができます。参加者の皆さんは、シンプルな楽器から生み出される豊かな音色に驚いていらっしゃる様子でした。実際の演奏は意外と難しかったようですが、次第に慣れていろいろな響きを楽しんでいました。お話と体験を組み合わせたイベントでしたが、参加者の皆さんにはご満足いただけたようでした。

（学芸グループ　中田　篤）

「ホムス」を演奏する荏原講師

ロビー展・オホーツクシリーズ11

北の状景から

2018. 1. 6−1. 21

会場：北方民族博物館・ロビー

北方民族博物館では、北海道・オホーツク地域の文化的活動を紹介する展示「オホーツクシリーズ」を続けてきました。第11回目の今回は、この時期恒例となった写真展「北の状景から」を開催しました。オホーツク地域には、一年を通して人びとを引きつける被写体が豊富にあります。本ロビー展では、網走市やその近隣地域在住のアマチュア写真家4名から出展いただいた作品25点を展示しました。

まず、日下部償二さんの作品は、網走市とその近郊の風景で構成されていました。二ツ岩やサンゴ草、流氷が浮かぶオホーツク海など、網走の代表的なスポットが取り上げられ、市民にとっては親しみやすい、網走のイメージに合った作品が並んでいたのではないかと思います。

小西正敏さんの作品には、廃墟となった建物や取り壊し中の風呂屋など、ちょっと変わったものが多く含まれていました。出展作品全体を通して「滅びゆくもの」と「再生」という共通テーマを設定されたということで、不思議で個性的な空間を作り上げていました。

村井透さんの作品は、冬に網走の街中でおこなわれたイベントに集う人たちと、野生のモモンガの写真から構成されていました。風景写真が多いなか、人や動物の一瞬の表情を温かいまなざしでとらえているのが特徴で、作品のタイトルもユーモラスなものとなっていました。

坂森ナミさんの作品は、やはり風景写真ですが、特別な場所ではなく、普通の場所でみられる特別な一瞬をとらえたものが中心でした。満開の桜や鮮やかな青空、靄で少しかすんだ風景など、色彩が豊かで、その場の光や空気がしっかり表現されているという印象を受けました。

このように、今回の「北の状景から」展は、撮影者それぞれの個性が色濃く出たものになったのではないかと思います。

（学芸グループ　中田　篤）

村井透さん出展作品「ブチッ!!」

企画展

永遠のジャッカ・ドフニ

北方少数民族資料館ジャッカ･ドフニの35年間

2018. 2. 3–3. 31

会場：北方民族博物館・特別展示室

かつて「北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ」という名称の、ウイルタ、ニブフ、サハリンアイヌの文化を正しく理解してもらうことを目的にした資料館が網走にありました。ジャッカ・ドフニとは大切なものを収める家という意味のウイルタ語です（jakka＝宝　duxu＝家　ni＝その）。

本企画展ではジヤッカ・ドフニの活動の35年間を、その旧蔵資料や展示室で使われていたパネルにより紹介しました。

サハリン島ではウイルタ、ニブフ、サハリンアイヌの人たちが暮らしてきました。サハリン島は、どの国に帰属するのかはっきりしない時期が続いていましたが、1875（明治8）年の樺太・千島交換条約により、全島がロシアの領土となりました。その後、日露戦争後の1905（明治38）年のポーツマス条約で、日本とロシアはサハリン島の北緯50度を国境とすることを決めました。日本領は樺太とよばれます。

樺太のサハリンアイヌをのぞく少数民族の多くが敷香（現在のポロナイスク）郊外のオタスの杜とよばれた場所に、暮らすようになってゆきました。

第二次世界大戦のため、ウイルタやニブフの若者たちも軍事訓練を受けるようになりました。戦後、スパイ容疑をかけられ、オタスの多くの男性がシベリアの収容所に送られることになり、そこで亡くなった人もいます。ダーヒンニェニ＝ゲンダーヌ（日本名 北川源太郎）氏も収容所を体験します。

ゲンダーヌ氏は、1955（昭和30）年の引揚げ後、網走に居住し、義理の父である北川ゴルゴロ氏をはじめ、家族をサハリンから網走によびよせます。

1973（昭和48）年から、北海道北見工業高等学校教諭の小池喜孝氏を中心に、オホーツク地域の虐げられてきた人たちの歴史をほりおこす、オホーツク民衆史講座がはじまりました。このオホーツク民衆史講座第四講は「オロッコの人権と文化」がテーマに設定され、北海道網走南ヶ丘高等学校教諭の田中了氏とゲンダーヌ氏がゲストに招かれました。ゲンダーヌ氏はこの講座で、日本人からうけた差別や、収容所での過酷な生活について語りました。この講座をきっかけとして、オホーツク地域でのウイルタへの関心が高まることになります。なお「オロッコ」はウイルタを指す語ですが、現在では使われません。

オホーツク民衆史講座での講演以降、ウイルタの人権を守りたいという気持ちになった人たちが中心となり、1975（昭和50）年７月に「オロッコの人権と文化を守る会」（後のウィルタ協会）が結成されます。

北川ゴルゴロ氏は、シャマンとして知られた人で、研究者に協力してウイルタの昔話や習慣を数多く残しました。この功績により、北海道文化財保護功労者に表彰され、安藤哲郎網走市長らが呼びかけ人となり祝賀会がひらかれました。大勢が祝ってくれる姿に、ゲンダーヌ氏はウイルタ文化を継承していくという決意をもちました。また、この席でオロッコの人権と文化を守る会の窪田茂人会長が、オロッコ会館構想を発表し、ジャッカ・ドフニの開館につながってゆきます。

そして北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニは1978（昭和53）年８月５日に網走市の大曲に開館しました。初代館長にはゲンダーヌ氏が就任しました。

ジャッカ・ドフニの建設にあたり、網走市は土地を無償貸与し、多数の寄附も寄せられました。寄附は開館以降も寄せられ続け、非常に多くの支援によりジャッカ・ドフニは運営を続けました。少数民族が自ら博物館を設立し、情報発信をしていたことや、展示資料にふれることができるという、いまでいうハンズオンの手法をとりいれていたことなどからも画期的な博物館でした。

開館後もジャッカ・ドフニは冬の住居アウンダウや、夏の住居カウラを建てたりして拡張してゆきます。展示作品集も発行されました。サハリンとの交流も積極的にすすめ、友の会も発足し、協力者によるミュージアムグッズの開発もおこなわれました。

大勢の支援によりジャッカ・ドフニは開館以来地道な活動を続けてきましたが、建物の老朽化などを理由に、2012（平成24）年に閉館し、資料は北方民族博物館に収められました

アンケートには、ジャッカ・ドフニのことを初めて知ったという感想もありましたが、閉館したジャッカ・ドフニを気にかけていた方が多くいらっしゃったこともわかりました。

（学芸グループ　笹倉 いる美）

会場の様子

講座

海外写真でたどる日本の近代捕鯨

2018. 1. 20

講師：宇仁義和氏　（東京農業大学嘱託准教授）

宇仁義和氏

昨年開催して好評だった、海外写真紹介の講座を、東京農業大学の宇仁義和嘱託准教授を講師に開催しました。

今回は捕鯨がテーマで、ノルウェーの捕鯨船砲手のヘンリク＝メルソム氏とアメリカ自然史博物館学芸員のチャップマン＝アンドリュース氏が1900年前後に撮影した写真が中心になりました。

捕鯨砲による近代捕鯨はノルウェーではじめられ、世界に広がりやがて日本にも紹介されました。ヘンリク＝メルソム氏は日本の長崎捕鯨や東洋捕鯨でも活躍した人物です。当時日本の捕鯨会社は日本国内の他、朝鮮半島でも活動を行っていました。

講座ではメルソム氏が撮影した、現在の韓国蔚山（ウルサン）にあった捕鯨会社の様子や、長崎や福岡の風景写真が紹介されました。紹介された写真は、メルソム氏の次女が保管し、ノルウェーのテンスベルク市のアーカイブに寄贈されていたものを宇仁准教授が複写し、地形などから、撮影地を特定したものです。蔚山広域市南区と網走市は、捕鯨が縁で友好パートナーシップ協定を結んでおり、網走市民にはなじみのある地名です。

チャップマン＝アンドリュース氏は、絶滅したと思われたコククジラを再発見した鯨類研究家でもあります。宮城県石巻市鮎川や、和歌山県串本町紀伊大島で捕鯨の様子を撮影していました。アンドリュース氏の捕鯨調査の目的には、アメリカ自然史博物館に展示する標本を収集することも含まれていました。このため、紀伊大島で捕らえられたシャチを競り落とし、標本にして本国に送るなど、日本近海の鯨類を収集しました。これらの標本はいまもアメリカ自然史博物館に収蔵されています。鮎川で撮影された写真には、クジラを解体場に引き揚げる様子や、加工の状況もあり、鮎川が捕鯨の一大基地であった状況がわかります。

宇仁氏の研究の成果は蔚山での写真展開催につながり、図録も発行されています。

（学芸グループ　笹倉いる美）

講座

場所請負人と白老

2018. 2. 24

講師：野口泰弥（当館　学芸員）

今回の講座では文政10（1827）年から明治２（1869）年まで現在の北海道白老町にあたる「白老場所」の場所請負人であった箱館商人野口屋又蔵の家系史を扱いながら、白老を中心としたアイヌ民族と請負商人の関係を紹介しました。

本講座は発表者が2016年～2017年にかけて、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の助成を受けて行った研究に基づき、新たに発見された歴史資料を用いながら、そこから見えてくる請負人とアイヌの関係について紹介を行っていきました。

よく知られているように、この時代の場所請負人はアイヌを労働力の一部として漁業経営を行い、また現地の拠点である運上屋は幕藩体制下のアイヌ統治の末端機関として機能し、当時のアイヌ社会に決定的な打撃を与えました。

講座では主に次の4点を考察しました。①初代又蔵の場所請負人就任の背景、②水戸藩の商人による蝦夷地調査から分かる天保9（1838）年頃の野口屋と白老アイヌの関係、③現在の小樽市にあたる高島場所で活動した野口屋の別家と、白老アイヌの高島場所出稼ぎの関係、④野口屋一門が持ったと考えられるアイヌの妾の事例です。

発表者が予想していたよりも多くの参加者に恵まれ、関心がある方のみに配布する予定だった資料も、用意した部数全てが無くなるなど、北海道史、アイヌ民族史に関する関心の高さが伺えました。

また当館が位置する網走市も場所請負人との関係が深い土地です。参加者の中には、斜里場所の実態を紹介するために御自身が現代語訳した松浦武四郎の『知床日誌』の一部を配布された方もいらっしゃいました。

講座終了後には多くの参加者から叱咤激励を頂戴致しました。頂いたコメントは、発表者が今後の研究の方向性について良く考えなければならない重要な点が多く含まれていたように感じました。気を引き締めて、今後もしっかりと研究していかなければと思った次第です。

会場の様子

（学芸グループ　野口 泰弥）

ロビー展　ノーザン・ギャラリー　イヌイトの版画①

会期　平成30年４月14日(土) から５月20日(日)
会場　北方民族博物館ロビー
観覧無料

北方民族博物館が所蔵するイヌイトの版画のなかから、
約30点を紹介します。

Luke Anguhadluq制作『動物を呼び寄せる』

北海道立北方民族博物館研究紀要第27号目次(平成30年３月刊)

研究ノート

網走湖とその周辺における氷下漁：環境依存型漁獲活動としての考察　吉田　睦
サハ共和国アルダン郡におけるエベンキのトナカイ牧畜―夏季拠点における事例研究―（英文）　中田　篤
ウラル・シベリア型ヒモバネ式罠と北米地域への普及経路について　野口泰弥

調査報告

骨角器の分析による4,000年の文化変化（後半）―アラスカ州ホットスプリング遺跡再考―　椙田光明
木村捷司が描く樺太・オタスの北方民族　その背景と人々（３）網走市立美術館所蔵作品より　古道谷朝生・笹倉いる美
網走市能取岬西岸遺跡b地点発掘調査報告　種石　悠・内山幸子

資料紹介

ソ連時代のツングース諸語教本・読本類を中心とする文献リスト　津曲敏郎

資料

のるりすと　2017　―北方研究データベース―　笹倉いる美

INFORMATION

行事報告

◆12月16日(土) はくぶつかんクラブ「カレンダーづくり」(講師：菅原章子解説員) を開催しました。

カレンダーをつくる

◆12月27日(水) 札幌交響楽団員の市川ヴィンチェンツォ氏、福井岳雄氏、荒木聖子氏、猿渡輔氏をお招きし、ロビーコンサート2017「青少年のための室内楽の夕べ」を開催しました。

札幌交響楽団の皆さん

◆１月27日(土) はくぶつかんクラブ「雪あそび」(講師：野口泰弥学芸員他) を開催しました。

◆２月10日(土) 開館記念感謝DAYを開催しました。

トナカイぞり体験

◆２月17日(土) はくぶつかんクラブ「バスケットづくり」(講師：平栗美紅解説員) を開催しました。

上手に出来たかな？

◆２月20日(火) 講習会「ウイルタのミトン『マンバッカ』づくり」(講師：笹倉いる美学芸主幹) を開催しました。

◆２月25日(日) 解説会「企画展展示解説会」(講師：笹倉いる美学芸主幹) を開催しました。

受賞報告

◆１月18日(火) 東京都の一ツ橋ホールで開催された第５回国際北極研究シンポジウム（ISAR-5）にて、野口泰弥学芸員と近藤祉秋氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教/当館研究協力員）が共同発表したポスターが、若手研究者優秀ポスター賞を受賞しました。

北方民族博物館だより
No. 108

平成30(2018)年３月27日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
　一般財団法人北方文化振興協会